

文 苑

和 文

春夜聽琴記

中熊 蘆 月

晝は終日鶯の音にさそはれて、花の木蔭に暮し、夜も燈の下に、書よまむの心地もせ
で、そこはかどなく、うかれ出れば、遙かなる峯よりさし登る月影に、一村の白雲、たぼ
るにたなびく、こはいかにと近う見れば、小高き岡の上に、松など所々交りて、櫻の咲
けるなりけり。鶯こそ、なかね、色香はをさく、晝のながめに劣らず。花の吹雪に、袖う
ちはらひて、木蔭をゆけば、とある老木の下に、人の臥せる。よく見れば、瓢を枕になし
て、酔ひふしたる男なりけり。花はこよひの主人ならましの風流、いとゆかし。男女の
打むれて、酒のみ歌うたひし所も、今は月のみぞ花の友にはありける。時にあなたを
流るゝ小川へだゝて、妙なる琴の音、まけり。いと、たく、かしく、て、丸木の橋渡り、ゆげ
ば、たぐらき林の中に、燈火の影は、のかに見ゆ。やがて、そが家の前に、いたれば、廣き池、
ありて、石橋かゝれり。うち、柴の扉ふかく閉ぢ、茅の庵の、いやしからず、住まなした
る庭には、篋の音のどかに、たのがまゝなる木々のふるまひ、いと氣だかし。いかなる
人の庵にやあらん、そのよし尋ねば、やと思へども、さすがに心ねさせられて、たゞす
めば、門守る犬のはゆるに、琴の音絶えて、またつゞく。よく聞けば、想夫戀の曲なりけ

り。さる女のすみかと思へば、音なふだにもせず、きゝぬたるに、曲終りて、若き女の聲、
して、花よ、今宵は、はやいたくふけぬ戸、さしてよどいひて、遣戸ひきし、後は物の聲も、
せず、やがて家路につけば、先の風流男も、今はみえず、たい大空の月の花の木間に、す
みけるのみなりけり。

藤堂先生評曰、風神古に逼り、其妙即かず、離れず、未段曲終りて、江上數峯青し

和歌

阿蘇公の御館にて足利追討の

綸旨と螢丸の刀とをみ侍りけ

る時によめる

東園のあるじ

この勅うけて髻れしこの君のたまこそひかれこの螢丸

波野原をすきて

行く人もなみのゝ原の花すゝきはに出てゝたれをうち招くらん

宇佐宮に詣てゝ

うさの宮みことかしてみ詣てけん心し思へは涙し流る

硯友會和歌

柳の下に人のたてるかた(兼題)

蝶

二